えは、多分クラシックのほうがいいんじゃないか」と、こう言うわけです。「それじゃ私、何すりゃいいんですか」ときいたところ、「とにかくこの曲2曲覚えろ」と、こう言いました。

それが僕の19の時でした。それでクラシック2曲覚えたんですが、またまNHKに試験があったわけです。洋楽のオーディションがありまして、これを受けることになりました。行って2曲うたったんですが、芸大の人たちがばたばた落ちる中で、僕が入っちゃったんです。その日、NHKを受けて僕一人だけが受かったんです。だいたい受かるにしても、22、23歳が普通だそうですから、今でも最年少記録だということです。

私、その時19歳の秋でした。「これはひょっとすると、私、いい声なんじゃないかな」と、そこではじめて自分の持っているものに気が付いたようなものです。そこでNHKから、「今度は番組を作るから、8曲持って来るように」と言われました。ところが、急に「8曲持って来い」と言われても、僕は2曲しか知らないわけです。しかたがないので、もう一度バンマスの所へ行って、「あと6曲なんとかして下さい」と、頼みました。

そのバンマスの同級生に、かの有名な大谷冽子さんがおりました。「大谷冽子を紹介するから、行ってみろ」と言われて、大谷先生の所へ伺いました。そこで何とか残りの6曲を作っていただいたのですが、そうこうするうちに、先生は「君は絶対、武蔵野音大でもどこへでも入れるから、2年ぐらいちゃんと勉強しなさい」と、こう言うんです。

「ピアノはどうなの？」ときますから「いえ、全然できません」「じゃー、ソルフェージュはどうしたの？」「いいえ、全然やったことがありません」「しょうがないわね。では、私が先生を紹介してあげるから……」ということで、武蔵野音大のピアノの先生を紹介していただきました。

最初は、バイエルというのをやらされました。ところが、これを3カ月続けますと、もういやになってしまったんです。そこで、大谷先生に「先生、僕、もういやになったよ」と言ったら、「しょうがない子ね」と言いながらも、先生に今度は、聴音といって、音を聴いて楽譜に書くという勉強をさせられたのです。ところがこれも3カ月ばかり続けますと、もうだめなんです。また先生に「いやになった」とだだをこねたところ、「しょうがない、あんたは大学は諦めて、歌やりなさい」ということになって、大谷先生の内弟子に入ることになりました。

そのうちいろいろ、飯を食わなければならないという事情にさしせまられてきました。とにかく私の場合、歌をうたうということは、金をもらうということで、18すぎぐらいの時から、ずっとそれを続けてきました。その時は、NHKの子ども番組だったのですが、そのレギュラーを一本いただきまして、一年間この子ども番組をやりました。

その後、立川清人先生に会う機会に恵まれたんです。当時ヒルトンホテル、今はもうホテル東急と言うのですか、そのヒルトンホテルでのイタリアン・フェスティバルというのに、僕はイタリア人と二人でショーに出ておりました。

その時、たまたま立川先生、若杉弘さん、芸大の畑中教授といった人たちが、飯を食いに来ました。

「あいつ、おもしろいんじゃないか」という話になって、立川先生が私を二期会に紹介してくれたわけです。

さて、二期会のオーディションを受けようと思って行きました。ところが、今を時めく最高の歌い手たちが7、8人、発声練習をやっていたんです。僕はこれを横で見ておりまして、「こりゃ、もうだめだ」と思って、逃げだしたんです。逃げだしたところ、立川先生のマネージャー、青木さんというのですが、この人に見つかりました。しかたなく、私は「とてもオーディション受けるガラじゃないので、失礼します。逃げます」と言いました。「あんた、逃げるのはかまわないよ。でも、立川さんに一言だけでも挨拶してから帰りなさい」と、こう言われました。

そこで、試験が終わるまでずっと横で待ってました。やがて、立川先生が降りてきたのです。しかたがないので、立川清人先生の所へ行って、「すみません、今日は、あんなすごい人たちとじゃ、とても試験受けられませんでした。失礼します」と、言いましたところ、「バカ野郎！」と一喝されました。立川先生は「みなさん、もう一回！」と、もう一度審査員の人たちを、審査の席に戻しまして、僕一人だけのオーディションをやってくれたのです。

こうして、私はクラシックの世界に入ることになりました。こういう

経過をたどってクラシックに入りましたが、その時一番困ったのは、金でございます。その後何度も何度も、いろいろな人に助けられました。

日大芸術学部の教授で、近江栄という方がいらっしゃいます。ある時、僕は殆ど食い物がないというギリギリの状況にありました。その時、教授が「おまえ、どうしたんだ」ときかれましたので、「ハイ、実は、金がないんです」と言いましたところ、あの当時50万円という大金を、ポンと出してくれたのです。「おれも貧乏人だ。たかだか学校の教師だ。だからおまえにやる金はない。その代わり、駿河銀行神田駿河台支店の普通預金口座のおれ宛に、できるだけ早く返せ。ただし、期限は問わん」ということで、急場をしのがせていただきました。ですから、あの先生には、今でも足を向けては眠れないわけです。

この世界に入れていただいたばかりでなく、ここまでにしてくれた立川清人先生、今はもうおなくなりになってしまいましたけれども、先生には音楽のことはもちろん、金銭的にもいろいろご援助いただきました。

それから、私は今銀座でいろいろ仕事をしておりますけれども、そこに大西日比生という会長がおりまして、その会長がおりにふれ、援助してくれます。ま、あまりたくさん金はくれませんが。

こうした形では、いろいろみなさんにご迷惑をかけてきましたが、では、金のためならどんな仕事でもできるものなのかと言うと、そうでもないのです。

相談相手がなくて、ひとり頭を抱えて悩むことがよくあります。なぜ悩むかというと、喜んでできる仕事がなかなかないわけです。その仕事が、自分に似合うか似合わないかということがございます。日本の今のクラシックの歌い手というのは、仕事する機会が少ないものですから、それが自分に似合おうが似合うまいが、来る仕事は全部お受けするという、非常におかしなところがあるのです。

ある時、読売交響楽団の仕事でしたが、一晩中考えたって結論が出ませんでした。そうしたら、君に似合うかどうかは、他人の目のほうが確かだ、と4、5人の友人たちが言ってくれたのです。それで、周囲の人にきいたら、君には似合わんということでしたので、私は即座にその仕事を止めさせていただきました。

しかし、あの当時、私にはキャリアもなければ、何もない、ある意味では学力もないわけです。こういう人間が、一発失敗したら絶対起き上がれないのが、この世界です。ですが、今考えればよかったと思っております。ですから今は迷わず、確実に仕事をしたというか、絶対にミスをしないというか。こういう仕事なら、本番では絶対にミスはしません。さすがと言われる仕事、小さい仕事なんですが、そういう仕事だけ引き受けることにしています。

今ちょうど、メリーウィドウというステージを、これから上野の文化会館でやるのですが、この中のニューグスという役、これは日本で今僕は誰にも負けません。そういう自信の持てる仕事だけしかするのを止めよう。その代わり、まあ、あまりみいりは期待できないわけですが、でもあいつにあれをやらせれば、「ちょっとやるじゃない」と言われるような仕事だけをしよう。そんなふうに今、思っています。

僕の好きな、と言うよりも、好きで好きでたまらない詩があります。たまたま神田の神保町の古本屋で手に入れたものです。あまり知られていない詩ですが、僕は好きです。作者もよく知りません。

無学　利己的　不勉強
学問を尊敬して　憧れている
怠惰
本を　割りに買う
ただし　読まない
スポーツに憧れる
しつこくて　粘り強い
臆病　涙もろい　衒学的
偽善者
ただし　心は優しいのだ
誰にでも惚れる
浪費　性格が明るい
一言にして言えば
良いことがわかるくせに
実行できない人間

という詩がありまして、ちょうど、